

連載：『英国建築都市環境委員会（CABE）から学ぶ、多軸的な都市デザイン政策』

第一部 CABE から学ぶべきこと

第二回 CABE のキャンペーン・教育活動と出版物

スペースシンタックス・ジャパン株式会社

高松 誠治

はじめに

前号では英国建築都市環境委員会（CABE）の活動を俯瞰したが、今回はそのうちのキャンペーン・教育活動と出版物について述べる。CABE の活動の中では、とかく「デザインレビュー（案の評価）」に注目が集まりがちであるが、レビューが実効性を持って機能している背景には、（本連載のタイトルにもあるとおり）それ以外の多軸的な活動による素地づくりがある。

デザインを評価することには、非常に高度なコミュニケーション技術が求められ、ある一定の素地がなければ成立しない。ここで言う素地とは、都市空間のデザインの良否についての共通の認識・理解や、それについて客観的・建設的に語るための語彙の共有などである。一般に、独自の主義・主張があり、個性が強いとされる建築家・デザイナーが複数集まって議論する場であることを考えると、この素地をつくるのは容易ではなさそうである。CABE は、これをどのようにしてそれを成し遂げたのか、興味深いところである。

また、都市空間の質の良否について、その影響を受けるのは各地域の市民であり、市民が関心を持ち、その質的向上の必要性を十分に認識していなければ、デザインレビューの取組みは、虚しいものになると言えるだろう。

つまり、デザインレビューに実効性や意味を持たせるためには、自治体・プロジェクトの関係者や、一般の市民に対する普及・啓発活動がまず求められる。日本においても、このような都市空間の質に対する市民意識の大切さや、その高揚の必要性についての議論が始まっている。（文献1、2）

本稿では、CABE による普及啓発活動が、何を目的に行われ、どのような成果を挙げているのか、そして、それぞれの活動がどう関連しているのかについて整理する。また、それらの活動から、我が国が学ぶべきことは何かについて考えることとする。

CABE のキャンペーン・教育活動の特徴

ここでは、まず、CABE が行っている普及啓発関連の活動の概要を把握し、その特徴について整理する。

これらの多様な活動に関する情報は、そのほとんどが CABE ウェブサイト（www.cabe.org.uk）に掲載されており容易にアクセスできることから、多くの専門家に活用されている。中でも優良事例のケーススタディは、CABE による研究成果をベースにまとめられたものであり、最もアクセス数の多いセクションとのことである。

ウェブサイトには、この他、CABE と大学との協働による研究プロジェクトの成果や、CABE の各種活動から得られた知見等を基にした多くの出版物が掲載されており、無償でダウンロード可能である。中には動画によるもの（デザインレビューの紹介等）もある。さらに、キャンペーンやイベントに関する情報や、デザインレビューを受けた計画・デザインに対する CABE としてのコメント等も掲載されている。

これらの情報を並べて見てみると、CABE の普及啓発に対する一貫した思想のようなものが、感じられる。それらは以下のようなものである。

1) ターゲットを絞った戦略的な展開

誰に対してメッセージを発信することが都市空間の質の高めるために最も効果的かを考え、ターゲットを絞った活動を戦略的に行っているようである。特に、決定権者、専門家、子供達という3属性を対象とした活動が目立つ。

2) わかりやすく伝わりやすい表現

ウェブサイトや出版物等は、非常に見やすく、親しみやすいものとなっている。行政機関としては傑出したものと言えるだろう。

3) 良い循環をつくる仕組み

それぞれの活動を単独で成立させようとするので

はなく、相互に関連して効果を発揮するような仕組みとなっている。

以下、これらの特徴のそれぞれについて、詳しく述べる。

決定権者を対象とする普及啓発

個々のプロジェクトにおける計画やデザインの提案、複数の代替案の提示等は、プランナーやデザイナーといった各専門家の仕事であり、それらの質を高めることは当然、大切なことである。しかし、それ以前に、「良い専門家を選ぶ」という重要な仕事を行うのは、自治体の幹部職員や首長等の決定権者であり、また、大きく異なる代替案がある際にどちらかを選ぶのも彼らである。つまり、最終的に良いデザインの空間や建築物を実現することができるかどうかは、決定権者のデザインに対する意識の高さが大きく影響する。この点を踏まえ、CABEは、自治体や事業者の幹部を主対象とした普及啓発を行っている。

『The value handbook: getting the most from your buildings and spaces, 2006』は、公共空間デザインの「価値」について、地方自治体の首長・幹部職員の啓発を行うものである。質の高い建築物や公共空間をつくることは、経済的、社会的、環境的な効果といった様々な価値がある。また、良いデザインは、特別に追加の費用がかかるものではなく、良い施策を効果的に実行することによって実現可能であるということを実例を交えて説明している。

逆に、質の低いデザインがどのような損失を生み出すか、という注意喚起的な内容となっているのが、『The cost of bad design, 2006』であり、この出版に引き続いて、同名のキャンペーンも展開されている。

関連するキャンペーンとして「Design champions」がある。これは、各自治体や大企業において、良いデザインを擁護、推進する責任者（チャンピオン）を任命するよう奨めるものである。また、CABEは、任命されたデザイン・チャンピオンを支える教育活動を展開しており、例えば、「Building in Context」プログラムは、地域性の理解と、それに呼応した開発を進める手法を伝授するものである。

さらに、国の都市計画・デザイン政策をわかりやすく説明し、地方での実践を促すことを目的とした、『Making design policy work - How to deliver good design through your local development framework, 2005』や、地方版のデザインレビューの組織化、運営の仕方を解説した『How to do design review: Creating and running a successful panel, 2006』等、様々な

情報を、良く整理された出版物として提供している。

各地域でこれらのリソースを用いた素地作りが行われた上で、必要に応じて、さらに高度なサービスをCABEが提供するという流れとなっている。この普及啓発活動は、容易ではない面もありそうだが、事実、地方自治体の約7割がすでにデザイン・チャンピオンを任命しているなど、確実に成果は現れているようである。

専門家を対象とした教育

次に、都市計画や建築、ランドスケープデザインといった専門家を対象とした教育についてのCABEのアプローチを見てみたい。

様々な分野において、専門家による継続的な学習・研鑽（CPD）の必要性が叫ばれて久しいが、現実には多忙な実務家にとって難しい側面もある。しかし、とりわけ都市に関わる専門においては、急速に変化する社会構造の中で、都市計画・デザインに求められるものや、その理解の深度も大きく変わってきている。

英国においては特に、70～80年代の多くの都市プロジェクトの失敗（質の低い都市空間をつくってしまった開発など）の反省の上に立つ議論も多く、今となっては「問題のある」手法を、いまだ正しいと考えている専門家も少なくないのではないかという危機感がある。

CABE設立に携わったメンバーは、トレンドやファッションではなく、論拠に基づいた新たなアーバンデザインの理論、手法を確実に専門家達に伝える必要があると考えたようである。

『By Design- urban design in the planning system: towards better practice, 2000』は、CABE設立と同時に与えられた任務である「アーバンデザインの大切さを世に広める」というキャンペーンの一環として編集されたガイドブックであり、記念碑的な出版物と言える。これには公共空間デザインの要点が幅広くまとめられており、これまでに、多くの政府発行の文献等に引用されている。

その後もCABEは、様々な活動成果を鑑みながら、臨機応変に、研究・教育のテーマを設定している。特に近年は、幅広い専門分野を巻き込んだ活動を重視しているようである。このことは、「都市空間は様々な社会的な現象と関係しており、デザインの改善により多くの問題を解決できる」と考えているからに他ならない。例えば、犯罪の発生場所と空間特性は密接に関係しているという研究成果に基づき、Home Office(内務省＝警察を所轄)等と連携して、『Safer places: the

planning system and crime prevention, 2004, Home Office and ODPM, 2004』を發表している。これは、生活の場の治安を高めるための都市空間・建築の具体的なデザイン施策、手法をまとめたものである。

一方で、建築や都市デザインの専門家だけでは良い都市空間ができないということもまた、CABEが強く意識している点の一つのようだ。例えば、交通工学の技術者によって行われる街路設計が、都市空間の質に大きな影響を与えることから、これまでの標準設計的な考え方から大きく転換し、アーバンデザインの視点を加えるよう交通省(Department for Transport)に働きかけている。その成果は、新たな街路設計指針である『Manual for Streets, 2007, DfT and DCLG』として表れている。

CABEでは、出版物以外にも講習会形式の教育を行っている。毎年行われているアーバンデザイン教育の夏合宿をはじめ、公共空間を専門に扱うセクションである「CABE Space」による、緑の都市空間の維持管理をテーマとする3日間の研修など、いくつかのプログラムを展開している。

子供達を対象とした教育

普及啓発・教育活動の3つめの狙いとして注目したいのが子供達を対象とするものである。

まず、CABEの理事長 Sir John Sorrell (ジョン・ソーレル)氏が、ビデオ『A guide to design review, 2006』の中で述べた一節を引用したい。

「CABEの活動は全ての国民のためのものである。しかしなにより、来年我が国で生まれてくる70万人の子供達のためのものと考えたい。なぜなら、彼らは現在設計されている住宅で育ち、学校で学び、病院で処置され癒され、また、現在設計されている公園や広場、公共空間で遊ぶことになるのだ。だから私たちは、その子供達ひとりひとりの人生、生涯にわたる人生の質を、より良くするために活動しているようなものだ。もし、それが実現できたならば、私たちの全ての活動は価値あるものと言えるだろう。」

このように、CABEの活動の中には、将来の英国を担う子供達の事を考えた取り組みが多く見られる。また、実際に全国の学校の建て替えを行う大規模なプロジェクト等も展開している。

また、将来にわたって持続的に都市空間の質を維持し、高めていくためには、子供達が実際に良いデザインに触れ、その価値を認識する力を育てることが大切である。『How Places Work - Teachers' guide, 2006』(図1)は、主に、Secondary School (日本の小学校

高学年から中学校にあたる)の生徒が、現地見学を通して建築や都市空間について学ぶための、先生方に向けたガイドブックである。まずは、先生方に対して、必要な知識と情報を与えた上で、どのように現地見学を計画すべきかを示している。実際に、各地域のアーキテクチャー・センターの協力のもとに見学授業が行われている。その先陣を切ったのは、建築家 Sir Norman Foster (ノーマン・フォスター卿)であった。このプログラムの発表イベントでは、自ら設計した大英博物館グレートコートデザインについて、現地で子供達に授業を行っている。

さらに、CABEは、学校に対して、定期的な情報発信を行っている。『360°』がそれである。このように、一過性のものではなく、継続的に情報を発信することにより、子どもたちが、建築や都市空間に興味を持つきっかけを作っていると言える。この成果は、20年後、30年後に大きく表れてくるに違いない。

わかりやすく伝わりやすい表現

日本でも英国でも同様に、専門性の高い文書は、往々にしてモノクロの“ワープロ文書”で作成される傾向にある。もしそれが、ごく少ない関係者や専門家の間だけで読まれるような文書であれば良いが、専門外の人々や一般の市民にも広く伝えようとするメッセージであれば、問題である。無機質な文書では、ほとんどの人の目を引かないし、その内容が与える印象も薄いだろう。それは、グラフィックだけの問題ではなく、言葉選びも重要である。専門家が使う言葉や表現では硬すぎ、一般の人の心に訴えかけないことも多いからだ。

「都市空間の質を高めることは大切だ」ということは誰にでもわかるはずの単純なメッセージだが、その真の意味を理解してもらうことは容易ではない。良い空間とはどんなものか、良い空間の価値はどんなものかを伝えることが必要だからである。

CABEの出版物は、写真を多用した目を引く紙面、明解なレイアウトを持つものとなっている。また、言葉選びにも細心の注意を払っており、多くの人にとって解りやすい表現となるよう、専門のスタッフがチェックしているようである。ほぼすべての冊子が、フルカラーであるが、インターネット上の公開が基本のため、印刷費の制約はない(紙媒体の冊子は有料で販売している)。

このように、より「伝わりやすい」表現というのは、非常に重要である。グラフィックデザインに配慮することは、一般に、高価で時間がかかるという印象を持

たれているかもしれないが、フォントや色などについての一定のルールを設ければ、効率的に進めることはできる。最後のアウトプットで少しの投資をするだけで、全体の効果が何倍にも変わってくるのである。

CABE では、あらゆる文書をこのような考えで作成しているようで、組織の活動報告についても同様に気の利いたものになっている（『CABE counts: Annual review 2006/07, 2007』など）。これは、組織としての CABE そのものの存在意義、価値をアピールする上で、重要な戦略なのであろう。

良い循環をつくる仕組み

以上のように、様々な普及啓発活動を展開する CABE であるが、最も大切なことは、それらの活動が CABE 内外の他の活動と深く連関しているということである。

例えば、専門家教育により、アーバンデザインに関する基本的な認識や語彙を共有することにより、デザインレビューにおける議論を建設的なものにすることができる。また、本来、法的拘束力を持たないデザインレビューの意見に実効性を持たせるためには、市民や自治体等がその必要性や意義を認識している必要があり、その点でも普及啓発活動は重要である。学校で、建築や都市空間についての、見学授業を受けた生徒は、意識の高い市民になるだろうし、その内の一部は研究者や実務家になる可能性もある。

これらのような繋がりを、連関図として作成することを試みた（図2）。実際は、もっと多くの矢印が、多方面に向けて伸びていることと思われる。これを見ても、デザインレビューだけを単独で考えることが、如何に限定的な取り組みであるかということがわかる。

もっとも、1999年の CABE 設立当時には、ここまで

幅広く活動を展開することは予期していなかったようである。コミッショナー（理事）と専属のスタッフが、常に、活動成果を鑑み、軌道修正しながら現在に至ったようである。昨今、経済情勢の大きな変化があり、また近々、政権交代がある可能性もあるが、その中で、どう展開していくのか、今後の動きにも注目したい。

まとめ

本稿では、CABE の取り組みのうち、研究活動などをベースとするキャンペーンや教育活動、出版物について、どのように行われ、そんな効果を持っているかについて述べた。もちろん、英国と日本では、様々な状況の違い、文化や国民性の違いがある。しかし、普遍的なものとして、学び合える部分も多いと思われる。

例えば、普及啓発の手法として、ターゲットを意識し、伝わりやすい表現を用いる情報発信は、すぐにも参考にできるものだろう。また、個々の取り組みを、単体、単発で終わらせるのではなく、横断的に関連した、長期間な取り組みとすることの重要性は、再認識する必要があると思われる。

CABE の取組みを参考にしながら、日本なりのアーバンデザイン推進方策の議論を盛り上げていきたいものである。

参考文献

- 1) 都市計画 276号特集『都市空間のデザイン・チャンピオンとは?』, 日本都市計画学会, 2008
 - 2) シビックプライド — 都市のコミュニケーションをデザインする, シビックプライド研究会, 2008
- ※CABE 関係の出版物については、本文中に、それらのタイトルおよび出版年を示した。全て CABE ウェブサイト (www.cabe.org.uk) からアクセス可能である。

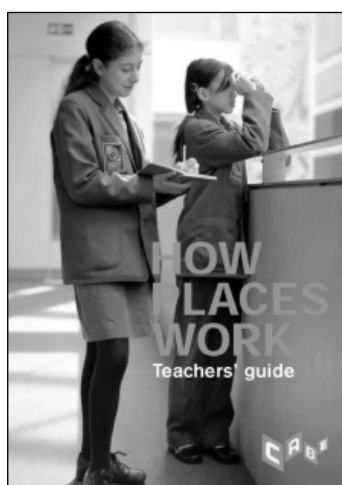


図1・見た目にも楽しい CABE の出版物 (© CABE)

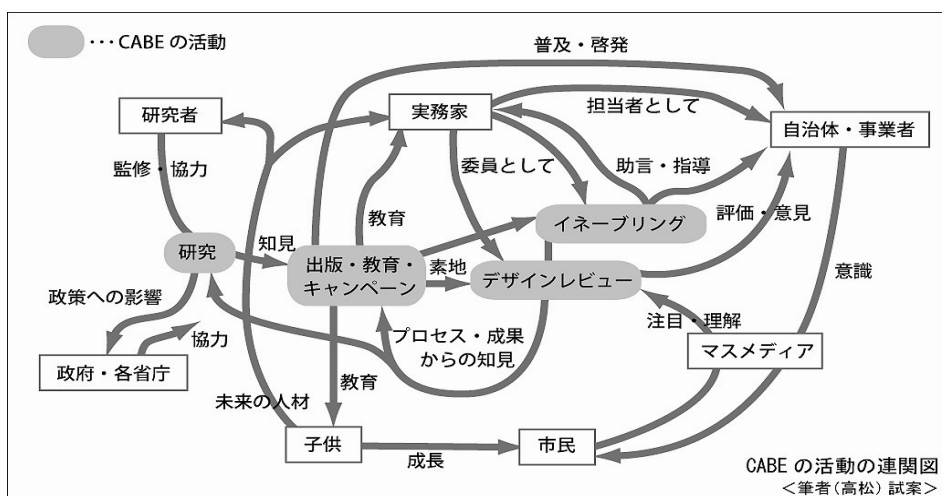


図2・互いに連関し合う CABE 内外の活動